

## こたまコラム (矢作新報社への寄稿内容)

終戦から七十年の節目を迎え、各地において様々なイベントも催されましたが、皆様は先の大戦についてどの様にお感じになりましたでしょうか。

私自身、先の大戦を経験した訳ではなく、映画やドラマ、更には大戦を経験された諸先輩方の体験談等を通じてしか戦争の悲惨さを理解する事は出来ませんが、それでも、七十年の節目を迎え、これまで以上に先の大戦に対する理解を深めたいと思い、終戦記念日には愛知県主催の「愛知県戦没者追悼式」に参列し戦没者ご英霊に哀悼の誠を捧げると共に、映画「日本のいちばん長い日」を鑑賞し、戦争に対する考えを整理しようと努めました。

特に映画を観て感じた事は、戦争末期にも関わらず、国の指導者達は戦況を理解しておらず、或いは敢えて現実から目を叛け、本土決戦によって現状を打破できると考えたが為に、原爆投下やソビエト参戦という最悪の事態を招いたという史実等は、戦争が為政者から如何に冷静な判断力を奪うかという事を教示しているように思えてなりません。

安倍総理は戦後七十年の節目に談話を発表されましたが、談話の中には「尊い犠牲の上に現在の平和があり、これが戦後日本の原点であります。二度と戦争の惨禍を繰り返してはならない。」と明確に述べておられます。

奇しくも、国政においては安保関連法案審議が行われていますが、日本の安全を脅かす行為への対抗手段は必要であると誰もが認めるものの、今回の法案は本当に過去の反省を踏まえているのか疑問に感じるのは私だけではないと思います。

従って、一度立ち止まり、真の平和国家として持続的発展を遂げると共に、世界から信頼される国策は何かを改めて議論し直す必要があるのではないかと私は考えます。



愛知県議会議員

こたま よしかず

樹神 義和 